**降誕節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年1月5日**

**「勇気を出せ」**

**創世記28章13～15節**

 **28:13 見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。**

 **28:14 あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。**

 **28:15 見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」**

**使徒言行録22章30節～23章11節**

 **22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。**

 **23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」**

 **23:2 すると、大祭司アナニアは、パウロの近くに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。**

 **23:3 パウロは大祭司に向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは、律法に従ってわたしを裁くためにそこに座っていながら、律法に背いて、わたしを打て、と命令するのですか。」**

 **23:4 近くに立っていた者たちが、「神の大祭司をののしる気か」と言った。**

 **23:5 パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています。」**

 **23:6 パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」**

 **23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。**

 **23:8 サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。**

 **23:9 そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激しく論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。**

 **23:10 こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りていって人々の中からパウロを力ずくで助け出し、兵営に連れて行くように命じた。**

 **23:11 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」**

1.

**新しい年を迎え最初の主の日の礼拝を共に守っています。私たちはこの年も主の日の礼拝を大切にして、謙虚に御言葉に耳を傾けていきたいと思います。**

**私たちは共に使徒言行録から御言葉を聞いています。その使徒言行録も23章まで進み、いよいよパウロがこれからローマへと旅をする、使徒言行録のクライマックスに入っていきます。ただ、パウロはこれまでの自由な身分ではなくて囚人としてローマへと連れて行かれて、その折々でイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えるのです。**

**少し間が空きましたが、今パウロはエルサレムにいます。ローマ人の千人隊長にはなぜユダヤ人がそこまでパウロに対して怒りを向けるのかがわかりません。パウロを尋問しようとしましたがパウロが生まれながらのローマ帝国の市民権を持つ者であることを知り恐ろしくなって身を引きます。そこで千人隊長はユダヤ人のことはユダヤ人に聞けとばかりにユダヤの祭司長たち最高法院を招集してパウロを彼らの前に立たせたのです。いわば公開の事情徴収です。**

**まずパウロが口を開いて自分は今まで神様の前に良心に従って生きてきたことを語ります。大祭司アナニアはパウロを最初から正しく裁くつもりはありませんのでパウロの口を打て、これ以上しゃべらせるなと命じたのです。パウロは言います「白く塗った壁よ」。イエス様が十字架に掛けられる前にエルサレムで律法学者とファリサイ派を非難された時にこのように言われていました。**

**「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。」（マタイ23：27）**

**イエス様は「白く塗った墓」と言い。パウロは「白く塗った壁」と言いましが意味する所は同じです。外側は偽善で美しく塗られているが、中身はひどく汚れているということです。**

**「あなたこそが罪でひどく汚れているのだから、あなたこそが神様に打たれるがよい」と痛烈な言葉をパウロは浴びせるのです。**

**パウロはアナニアを「大祭司と知りませんでした」と言いますが、もちろん本当に知らないわけなどあるはずなく、パウロは痛烈な皮肉を言うのです。**

**さらにパウロは最高法院の議員たちがファリサイ派とサドカイ派が占めていることをしり、「死者の復活のことで裁判にかけられている」と語ります。すると死者の復活を信じるファリサイ派と信じないサドカイ派の議員は激しく論争して議会は真っ二つ。パウロの公開事情徴収どころではなくなってしまったのです。これはおそらくパウロの計算通りです。こういえば議場が混乱することはパウロにはわかっていたのです。この混乱のためにパウロは再び千人隊長に助けられて兵営に連れて行かれたのでした。こうしてパウロは再び兵営で夜を過ごすことになりました。**

**パウロがエルサレムに到着して約1週間。エルサレムでのパウロの歩みを思いますと、苦難や困難や危険が待ち構えていると聖霊によって示されていたまさにその通りであります。幸いと言いますか不思議にも命は守られていますが、パウロははたしてどのような思いで兵営で夜を過ごしていただろうかと考えました。**

**そもそもパウロがエルサレム行く決心をしたのは第3次伝道旅行でエフェソにいた時です。**

**「このようなことがあった後、パウロは、マケドニア州とアカイア州を通りエルサレムに行こうと決心し、「わたしはそこへ行った後、ローマも見なくてはならない」と言った。」（19：21）**

**そしてパウロはできれば五旬祭までにはエルサレムに着いていたいと旅を急ぎ、エフェソの教会の長老たちをミレトスに呼び寄せて別れを告げました。エフェソの長老たちにこのように語りました。**

**「20:22 そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。**

 **20:23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。**

 **20:24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」エルサレムで苦難が待ち構えていても、恵みの福音を力強く証しをするその神様から与えられた任務を果たすために強い決意を持ってエルサレムに行きました。アジア・ヨーロッパの異邦人諸教会からの献金を携えてです。**

**いざエルサレムに到着すると、エルサレム教会から歓迎はされましたがエルサレム教会の指導者であるヤコブと律法の理解が異なっており、律法に従う姿を示さなければなりませんでした。そのようなパウロを見たユダヤ人たちはパウロが律法を軽んじて神殿を汚していると言いがかりをつけられて殺されそうになりました。その直前でローマ人の千人隊長に助けられて、ユダヤ人たちに弁明の機会が与えられました。そこでパウロが語ったのはイエス・キリストと出会って救われて異邦人に福音を宣べ伝える者へと召されたという証しでした。パウロはその証しを力強く語った、恵みの福音を力強く証しところユダヤ人たちの怒りに火に油を注ぐ形となったのです。そして今日の公開事情徴収の場面を経て兵営に連れて行かれて夜を明かすというのです。**

**あれだけの強い決意を持ってエルサレムに来たのですから、パウロとしては恵みの福音をもっともっと力強く語りたい思いがあるのではないかと思うのです。いうなれば主の召しに十分に応えられていないのではないか、十分な働きができていないのではないかという何かこうももどかしい思いがあったのではないかと思うのです。エルサレム教会からあまり歓迎されていない、同胞であるユダヤ人たちから全く受け入れてもらえないどころかユダヤ人たちから殺されそうになる、異邦人たちにもっと恵みの福音を語りたいのにその機会もない。ローマへの道も開かれない、かといってエルサレムから逃げることもできない。本当にこの道が御心に適っているのだろうか。何か八方塞がりの状況がパウロの中にあったのではないかと思います。**

1.

**そこにイエス様がパウロの側に立って言われるのです。夢の中で現れるのではない、はっきりと側に立って恐らくパウロの肩に手を置いて言われるのです。**

**「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」（11節）**

**また先日の臨時教区総会の按手礼式の話になってしまいますが、按手礼式は総会に出席している正教師が皆前に出て按手を受ける教師と按手礼を執行する教区議長を取り囲んで行います。その時前にいる牧師の肩に手を置いて、またその牧師の肩に手を置いてといくつもの列というか集団となります。すると何か後ろの牧師から力をもらって自分の体を通って前の牧師に伝わっていく不思議な感覚になります。**

**ほどんどの牧師は片手を前の牧師の肩に置くのですが、私の後ろにいて私の肩に手を置いた牧師は両手を私の両肩に置かれました。私は「両手を置くなんて珍しい先生だな」と思っていたのですが、何かいつも以上に大きな力を感じました。按手礼式が終わって席に戻ろうとして私の後ろで両肩に手を置かれた先生を見てびっくりしました。気賀教会の楠本史郎先生だったのです。もう20年近く前になりますが私が静岡の教会にお仕えしていた時に、楠本先生が東海教区の集会で講師で来て下さってその時に少しお話をさせて頂きました。楠本先生が私だと気づかれているかはわかりませんし、先生は按手を受けられる先生にエールを送られたのですが、両肩に手を置かれた私は「しっかりやれよ。頑張れよ。」と楠本先生から励まされているような気がしました。私は畏れ多い気持ちと共に「よし頑張ろう」との思いになりました。**

**楠本先生の励ましは私の思い込みかもしれませんが、パウロに対するイエス様の励ましは決して思い込みではありません。イエス様ははっきりとパウロの側に現れてくださったのです。そして「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」と語りかけて励ましてくださったのです。「勇気を出せ」この励ましの言葉は、別の個所では「安心しなさい」と訳されています。「なぜなら」とイエス様はその理由を語るのです。「なぜなら、ローマでも証しをしなければならない。」とイエス様は言われているのではありません。「エルサレムで私のことを力強く証ししたように」です。つまりエルサレムでのパウロの証しが大前提なのです。パウロはエルサレムでイエス様のことを力強く十分な証しができたわけではありません。それなのにイエス様は「安心しなさい。エルサレムでよくやった」と全てを受け止めて下さるのです。イエス様は「あなたはエルサレムでよく頑張った。よくやった。その調子でローマでもやりなさい。ローマでも頑張りなさい。だから勇気を出しなさい。安心しなさい」と肩に手を置いて励まして下さるのです。**

**イエス様はエルサレムの道を受け止めて下さったその上でエルサレムへの道よりもはるかに困難なローマへの道ですが、その道をイエス様が指し示して導いて下さるのです。何よりもその道をイエス様が共に歩んで下さるのです。だからこそパウロはイエス様が備えてくださった主の道をイエス様と共に安心をして勇気を出してこれから歩んでいくことができるのです。ローマでも力強くイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えるためにです。**

**「あなたはよく頑張った。よくやった。その調子でこれからも頑張りなさい。私はあなたといつも共にいる。だから勇気を出しなさい。安心しなさい」イエス様は私たちの傍らに立ち私たちの肩に手を置いて励まして下さるのです。このイエス様の励ましがどんなに勇気づけられて私たちの力になるでしょう。不十分な働きしかできていないと思うかもしれません。夜という闇にあっても「よくやった」「よく頑張った」と肯定してもらえるならこんなに嬉しいことはないと思います。「よし頑張ろう」「もうちょっと頑張って生きていこう」と安心をして、勇気を出して前を向いて歩いていけるのです。**

**新しい年もイエス様と共に主の道を歩んでいきましょう。イエス様の十字架と復活の福音を力強く宣べ伝えて証しをしていきましょう。**